



さよのいそ笛

北村けんじ・作 鈴木義治・画

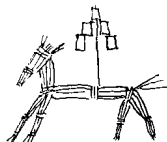
よのいそ笛

北村けんじ・作
鈴木義治・画



童心社

現代童話館 11



さよのいそ笛

昭和51年1月30日 第1刷発行

作 者 北村けんじ ©

画 家 鈴木義治 ©

発行所 株式会社 童心社

東京都新宿区三栄町22

電話 (357) 4181 (代表)

振替 東京75504

活 版 新興印刷製本株式会社

平 版 小宮山印刷株式会社

製 本 難波製本株式会社

＜作 家＞

北村けんじ (きたむら けんじ)

1929年三重県に生まれる。中部児童文学会、日本児童文学者協会、日本児童文芸家協会会員。著書に『うりんこの山』『まぼろしの巨鯨シマ』『トモカツキのいる海』(以上理論社)、『ハトと飛んだぼく』(大日本図書)、『チョビ屋は町のまがりかど』(偕成社)、『家の中は動物えん』(日本書房)などがある。

現住所 三重県桑名郡多度町戸津588-4

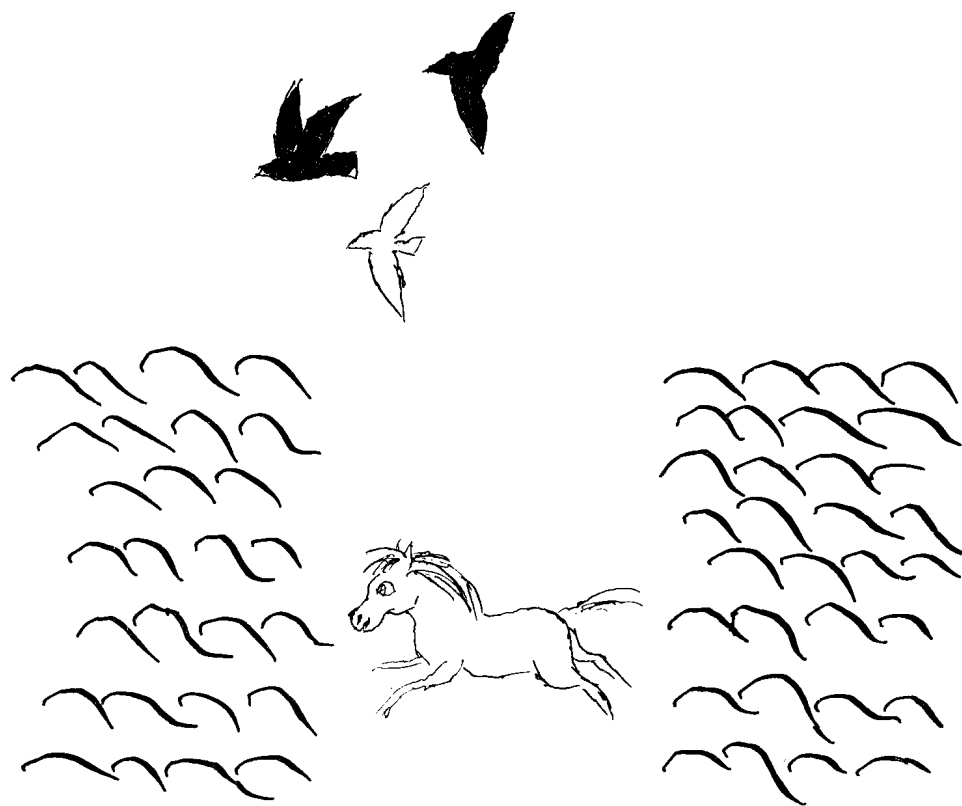
＜画 家＞

鈴木義治 (すずき よしはる)

1913年横浜市に生まれる。絵本に『はいいろぐまとしまりすたち』(ひかりの国)、『レミン・カイネンのぼうけん』(世界文化社)、『小さな小さなきつね』(国土社)、『子もりじぞう』(ポプラ社)、『かめのこせんべい』(岩崎書店)、さし絵に『天文子守唄』(理論社)、『ぼくの犬クロ』(偕成社)など多数ある。

現住所 神奈川県横浜市磯子区中原4-24-20

もくじ



2

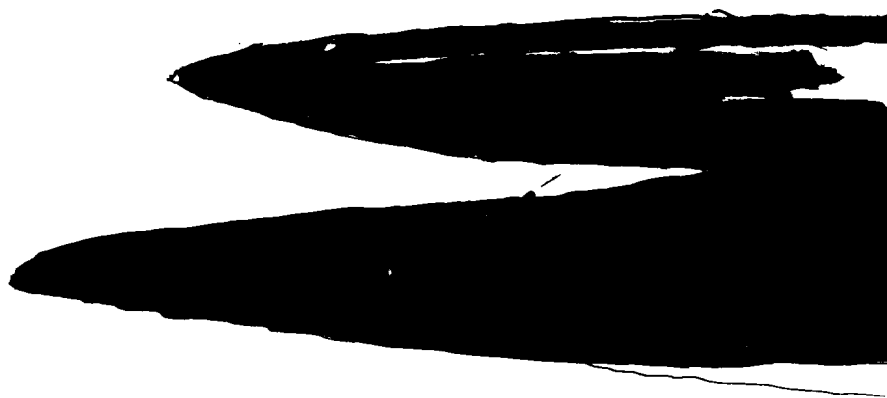
こんぶ色の海こま

22

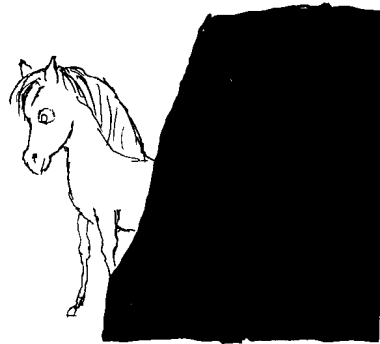
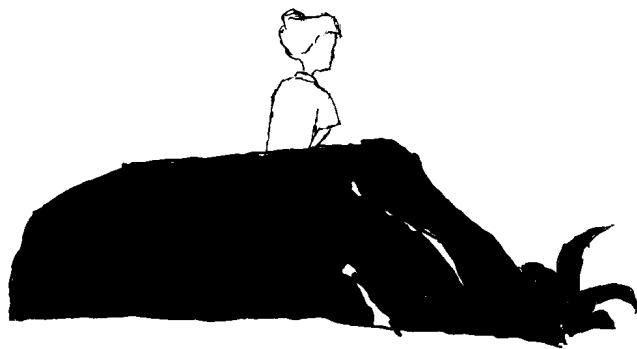
1

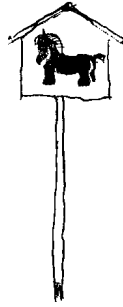
なんばせん船と白い米ま

7



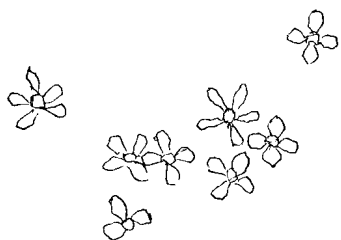
7	6	5	4	3
小海女 こあま になるとき	海こまがあらわれた	いそ祭りと船底破り ふなぞこやぶ	海女 あま のいのち	網 あみ の破れあなに……
100	86	73	59	33



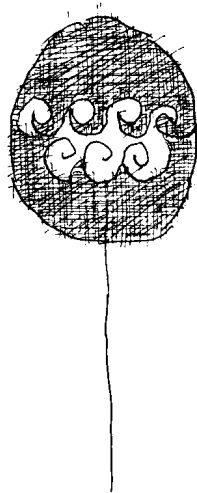


そう丁・さしえ
鈴木義治

さよのいろ笛



1 なんば船と白い米



なんば船と白い米

浜の波うちぎわは、馬のせなかのようにしなって、そのさきの岬は、海に首をの
ばした馬の頭ににいていました。

波が立つと、それは白いたてがみのようになびきました。だから、この浜を、コ
マガタ浜といいました。



もう夜ふけです。

「ばあやん、あれはなんの声？」

がけっぶちにしがみついた、とまやのなかで、まずしい海女ぐらしをしているさ

よは、ゆうばあやんにたずねました。さよは、ゆうばあやんとふたりぐらしでした。

「おらには、なんにもきこえやせんが。」

それでも、さよの耳には、波の音からはねあがったフィン……フィン……という声が、耳の底でしきりにするのです。昼間の浜できくいそ笛ではありません。

「海をこわがるもんじゃ、波はこわいまもの、声にきこえるもんや。」

さよは、十二になる女の子。海をみてそだったというのに、とても海をこわがりました。

それというのも、大海女だったおかやんが死んだからです。

その日、おかやんはどうあやまったのか、命綱が岩のすきまにはさまって、波のうえにうかびあがることのできませんでした。大海女が三人がかりで、その岩場にたすけにいったときには、おかやんのからだはすっぽりとぬけて、輪になった命綱だけが残っていたということです。

ふだん、ぶっちょうづらのおとやんも、さすがに力をおとし、おちくぼんだ目にとびだすほどやせてしまったところへ、たちのよくない、はやりかぜにつけこまれて、三日でぽっくりと死んでしまいました。

しかし、こわいといってもコマガタ浜に女の子として生まれたからには、海女になる浜のさだめがありました。それに、さしあたり、ゆうばあやは、さよを小海女にさせ、あわびやさざえを二つでも三つでもとらせて、くらしのたしにしたかったのです。しかし、さよはあれから海のなかに顔をつけると、ごぼごぼと頭のなかで鳴り、髪の毛のさきからとおい海底にひきこまれていきそうになるのです。

「海なんて、のうなれ、のうなれ！」

さよは、むねのまえで、こぶしをふるわせてさげびました。

「ああ、はがゆいのう。さよはいつまで、ねねでいるつもりやろ。」

ゆうばあやは、そうくやしがるたびに、顔にふかいしわをつくり、ふけこんでいくように思われました。

さよは、こんなゆうばあやんからとおくはなれて、さかなのようなまばたきをしないう目をむけたものです。

「ばあやん、やっぱりきこえる。フィン……フィン……と、きこえる。」

さよは、まくらから頭をおこし、耳をそばだてました。すると、耳がうさぎのようにながくのびたような気がして、思わずりょうほうの耳をおさえました。

「ね、ね、やからきこえるんや。小海女こあまになりさえすりや、なんもきこえやせん。それに、はらがすくから、まぼろしが頭あたまをよぎるんやて。」

ゆうばあやんは、あかりをふきけすと、ごろりとむこうむきになりました。

ふいに、しょうじのむこうに、黒いかげがうかびあがったような気がして、さは、からだをちぢめてかたくしました。小さなむねがとくとくと鳴なりました。それでも、いつのまにかそのかっこうのままでねむってしまったのでしょうか。

「なんばや。船ふねがなんばしたぞよう！」

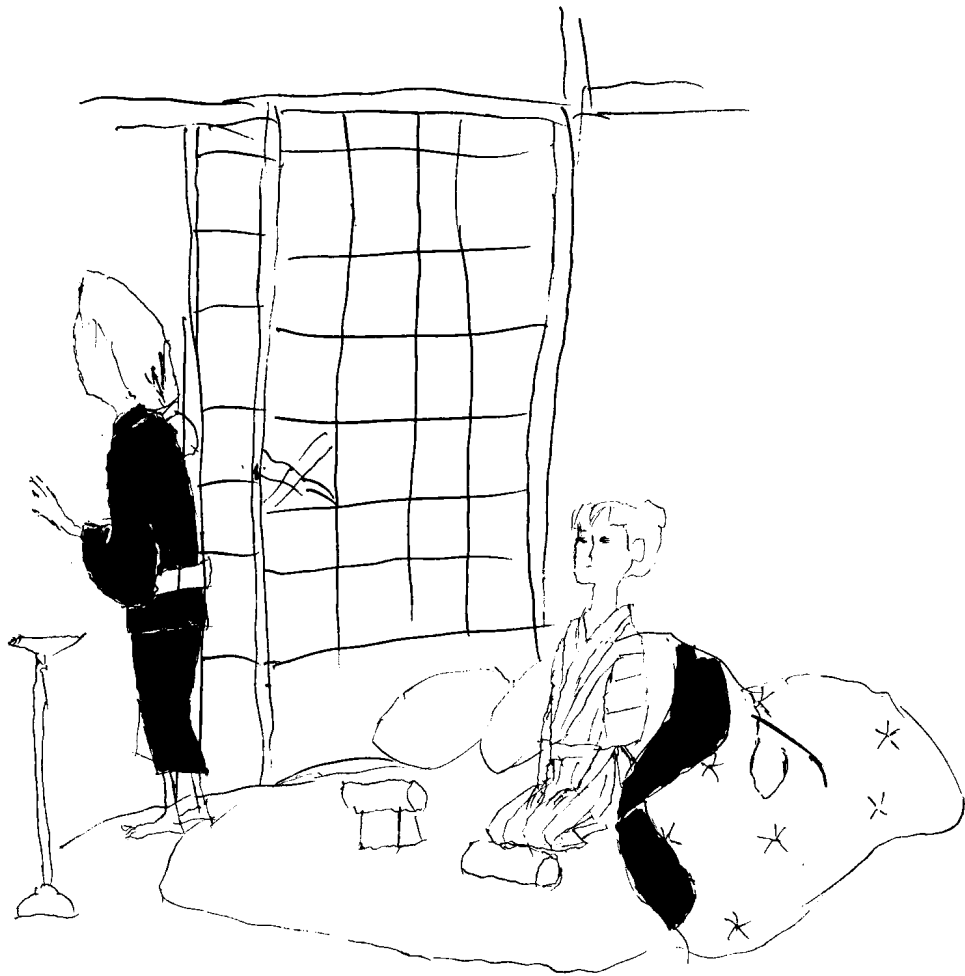
浜はまのほうできこえるその声で、さよは、ふと目をさしました。ゆうばあやんは、しょうじをあけると、沖おきのほうにむかってしょぼしょぼした目をむけました。

「船頭せんどうはどなたやいな。浜はまのもんか、よ、その国のもんか？」

ゆうばあやんの声は、しらじんだ朝にきりきりとひびきました。すると、きゆうなほそい石だん道をかけおりていく、りょうしや海女あまのおかやんのなかから、

「浜くまの熊ととやんや。」

と、どなる声がきこえました。その声をきくと、ゆうばあやんは、ねずみのように家のなかをはしりまわり、すみにあった竹かごをみつけると、それをわきにかかえ



ました。

「ばあやん、どこへいくん？」

と、かけよると、さよは、ゆうばあやんのおしりではねとばされました。さよはわけがわからず、ただおろおろするばかりです。

「白いまま食べたけりや、じっと、まっているんや。」

ゆうばあやんは、そういうなり家をとび出していきました。

海はないで波なみひとつたらず、ふつくとまるみをおびたそのはしに、へさきをはんぶん空につきあげている黒いなんば船せんがみえました。そのなんば船をめぐけて、二そうの小舟こぶねがつきすすんでいるところでした。

波うちぎわではおかやんたちが、なんば船にむかって、ほうほうとざわめき声をあげていました。さよは、大きく目をみひらきました。

船がなんばしたというのに、おかやんたちの声は、なにかいいことをまっているようにはずんでいます。あのだい網あみの大きいときのよう。

ゆうべは、風もたたず、海もあまりしけてはいませんでした。コマガタ浜はまの海のことなら底そこの底までしりつくしている熊くまととやんが、あんな浜ちかくで、船ふねのかじ

をあやまることはないはずでした。

——いってみようか。

さよは、おもてに出ようと思いましたが、やはり、それはやめることにしました。あの大ぜいのおかやんや男の子のなかには、

「ゆうばあやんとこのナキビソがきた……。」

と、じろじろとみまわすものがあるにちがいはなかったからです。

浜では、やくたたずの泣きむしの子どもをナキビソとはやしたてました。

さよは、いつものように貝のおもてにこぎれをぬいつけ、ちゅうつがいのところに小さな顔をかき、貝人形をつくりはじめました。ゆうばあやんが、水のしたたっているざるをかかえてかえってきたのは、それからしばらくたってからのことでした。

「あれっ、お米！」

さよは、こくんとのをならしました。

「そうや、米や。ひさしぶりにおがめる米つぶや。」

「どうしたん？」

いままでにも、こんなことがあったような気がしましたが、白いままにありつくことだけがうれしくて、つつい、そのまますごしてしまいました。

「きかぬことや、子どもはな。ことに、小海女こあまになれんさよにはな。」
そういわれると、さよはよけいききたかったのです。

「な、どうしたん？」

「なんば船せんが、このコマガタ浜はまにめぐんでよこしたんや。」

「なんば船せんが、どうして？」

「紀州きしゅうのとのさまの御上米船べじようまいせんが岩いわにのりあげ、しずんだんや。塩水しおみずふくんだ米は、おかみにはおさめられん。それで浜にめぐんでくれるんよ。」

さよは、米つぶを手のひらにすくいました。ぐっとにぎって手のひらをひろげると、米つぶは白い花火はなびのようにくつつきました。さよは、ひさしぶりにえがおをみせました。

「……けど、いうとくけどにや、さよはまだ小海女こあまになれんから、そのわけまえもはんぶんやと。」

ゆうばあやんは、さよのにつこりあけた口を、ふたでもするように、そういま